中学部（単一障害学級）　社会科（地理的分野）学習指導案

授業者　広島県立広島中央特別支援学校　教諭　鍵本　元気

１　日　　時　令和３年６月 28 日（月）　第５校時（ 13:00～13:50）

２　場　　所　中学部 ２学年Ａ組教室

３　年　　組　第２学年Ａ組　女子２名

４　単 元 名　防災地域調査

５　単元設定の理由

（1）単元観

本単元は，平成 29 年に公示された中学校学習指導要領解説社会編地理的分野の大項目「C 日本の様々な地域」の中項目「（１）地域調査の手法」に該当する。単元のねらいは，学校周辺の地域の地理的な事象を対象とし，実際に校外での観察や野外調査などの具体的な体験活動を通して，地理的技能を身に付けるとともに，場所などに関わる視点に着目し，地域調査の手法やその結果を多面的・多角的に考察し，表現する力を身に付けることである。そのため，様々な資料を的確に読み取ったり，地図を有効に活用して事象を説明したりする作業的な学習活動を通して，地域調査に関わる方位，縮尺，等高線，地図記号などの地理的技能を身に付けるようにする。さらに，防災などの視点に着目して主題を設定し，課題の追究を通して，地域調査の適切な手順や方法を考察できるようにする。具体的には，実際に地域調査を行い，その結果を踏まえた地図を作成し，地理的なまとめ方ができるようにする。

このように本単元では，様々な学習活動を取り入れながら，地理的技能の習得，地域調査の手法，地理的なまとめ方の基礎を身に付けることができる。また，このように身近な生活舞台を対象とし，地理的な追究の面白さを実感できる学習は，身近な地域の特色を捉えるとともに，我が国の国土に関する地理的認識を深めることにつながると考える。

視覚障害のある生徒は，空間を捉えることや空間のイメージをもつことが難しく，平面の線の結びつきで位置や形を捉え再現することが多いため，この学習では，立体地図を作成し触察を中心とした学習を通して，俯瞰的に地形全体の特徴を読み取ることができるようにする。

（2）生徒観

本学級は，単一障害の教育課程（準ずる教育課程）で学習する２名（女子２名）で構成されていて，二人とも本校小学部から進学した。

社会科では，地理的な技能を理解させるために，年間を通じて言葉による説明だけでなく，グラフや地図，触覚教材，視聴覚教材などの様々な資料から考察する活動を，生徒同士での対話や協働的活動，体験的学習を取り入れながら進めている。

生徒Ａは，点字を使用して学習している。点字の読みに関しては，両手を用い，初読で１分間に 180 マス程度読んでいる。書きに関しては，点字版を使用し，時間はかかるが正確に書くことができる。また，自力通学に向けた歩行練習中であるが，地理的空間概念や方向感覚につ

いて課題がある。自分を中心とした８方向については理解し動作化できるが，自分以外の対象物から見た方位や位置関係を捉えたり，情報量が多く複雑な地図の読み取りやルートを考えたりすることは難しく，白杖と視覚を頼りに対象物を確認しながら歩行している。

社会科の学習において，評価の三観点のうち，知識及び技能に関する地図や触覚教材などの資料の読み取りでは，触察で理解することに難しさがあるため，視力を使い色や形を捉えようと意欲的に取り組んでいるが，時間はかかる。これまで日本地図など様々な地図を触察してきたが，教師の言葉かけや補助用具がなければ，方位を確認することや，都道府県の位置も理解することが困難であった。片手のみで触察することが多いため，手前から両手の指先や掌全体を使って触るように指示するなどの支援も必要である。また，思考力，判断力，表現力等に関しては，読図や触察から気付いた内容などを色々なことと結び付けて考えること，自分の意見の発表や説明することに課題があるため，文章でまとめさせることや，聞いた内容を繰り返し発言させることなど通して，学習の状況を確認するような支援が必要となる。主体的に学習に取り組む態度に関しては，日頃から社会科や身近な社会的事象には関心があるため，ニュースなどで聞いたことがある内容や言葉，体験的に学び印象に残った学習などには素早く反応することができる。

生徒Ｂは，点字を使用して学習している。点字の読みに関しては，両手を用い，初読で１分間に 380 マス程度読んでいる。書きに関しては，点字版を使用し，十分な速度で正確に書くことができる。また，地理的空間概念や方向感覚は理解しており，地図から方位や位置関係を捉え，自分の言葉でルートや情報を説明することができ，歩行については自宅から学校までの往復ルートを正確に把握し，自力通学できるようになっている。

社会科の学習において，評価の三観点のうち，知識及び技能に関する地図やグラフなどの資料の読み取りは早く，地図の性質などが異なっても比較的正しく読み取ることができる。思考力・判断力・表現力等に関しては，資料や模型などの読み取りを基に，自分が感じたことや考えたことを単語で答えることはできるが，自分の考えや気付きを根拠とともに文章でまとめたり，説明したりすることに課題がある。そのため，生徒Ａに分かるような説明の仕方を考えて発言するように促すことが必要である。主体的に学習に取り組む態度に関しては，全般的に社会科への関心は薄く苦手意識も強いが，学習内容はよく定着している。また，ニュースや新聞の内容など身近で起きている事象についての関心は低いが，自分が疑問に思った社会的事象や興味のあること，模型や実物などの触察教材や音声を用いての体験的な学習については関心をもって臨むことができる。

（3）指導観

指導に当たっては，単元の導入で，本校に目の見えない・見えにくい人でも分かる学校周辺の防災マップがないことに気付かせ，「誰もが分かる防災マップを作って，みんなに伝えよう」というパフォーマンス課題を設定し，課題を解決するために必要な学習内容や方法を考えさせ，学習計画を作成させる。学習計画は，生徒が地図の読図や作図，地域調査の方法，作成した防災マップの発信方法などの学習の見通しをもつことができるようにする。そして，毎時間の導入で，学習計画を確認し，学習の必然性と連続性を意識付けながら学習を進めていく。また，単元全体を通して，生徒の関心を高め意欲的に探究できるように，触察教材や地図を中心とした資料の読み取りや地図の作成という作業的な体験学習を設定する。

本単元では，まず，地域調査に関わる地図の読み取りに必要な地理的技能として，方位，縮

尺，等高線，地図記号の順で理解させる。方位や縮尺を用いて，学校周辺の道路や建物などの実際の距離や位置を意識させながら地図に表現させる。その際に，用具を使って距離を測り，方位を確認しながら取り組ませる。等高線については，立体模型の触察から，等高線の間隔が傾斜の違いを表すことや，高低差の違いを俯瞰的に捉えさせた後，学校周辺の山を立体模型の組立てにより表現できるようにする。地図記号は，立体コピー機で作成した地図記号の読み取りを基に学習した後，学校からの距離や方位を用具で確認させながら立体地形図に添付させていく。このような手順で毎時間学んだ地理的技能を生かし，学校周辺の立体地形図として表現していくことで位置や空間をイメージできるようにする。

本時では，「どうして本校がこの地域の避難場所に指定されていないのか」という新たな課題の解決に向けて，これまで作成した立体地図とハザードマップを基にした客観的な資料を関連させながら追究させていく。その際に，立体地形図の触察により，土地の高低差や学校周辺の地理的要素を俯瞰的に捉えさせ，学校周辺における自然災害による被害がどこまで及ぶか予想させる。そして，土砂被害や洪水被害の予測される範囲と立体地形図とを照らし合わせることで，学校周辺の危険性とともに自然災害による被害の範囲外の地域にも気付かせ，「避難場所に必要な地理的条件とは何か」を考察させ，本時の課題の解決に迫らせる。このように予想して立てた仮説と，例年実施している水害避難訓練とを関連させることで，次時の地域調査への見通しと探究する意欲を高めていく。

次時では，実際に作成した立体地形図と同じ範囲の中で，調査対象を決め，地域調査を行うことで，これまでの地理的技能の理解を生かして地図や場所の位置をイメージさせながら，前時の仮説についての検証を主体的・体験的に考察させていく。

単元の終わりには，パフォーマンス課題の「誰もが分かる防災マップを作って，みんなに伝えよう」に向けて，地域調査の結果を立体地図へ反映させ，防災マップとしてそれを基にプレゼンテーション形式で，説明し合う活動をこの単元のまとめとして行う。そして，これらの一連の学習を生かして，特別活動の中で，生徒にとってより身近な生活舞台である自宅周辺の防災についても考察できるように教科横断的に学習を進めていく。

６　障害の状況

（検査月：令和３年４月）

<table>
<tr><td rowspan="5">生徒Ａ</td><td>眼疾患名</td><td>両</td><td colspan="5">眼球振盪による視覚障害</td></tr>
<tr><td>教育的遠距離視力</td><td>右</td><td>0.02</td><td>左</td><td>0.03</td><td>両</td><td>0.03</td></tr>
<tr><td>教育的近距離視力</td><td>右</td><td>0.04</td><td>左</td><td>0.03</td><td>両</td><td>0.05</td></tr>
<tr><td>最大視認力</td><td colspan="6">0.3（左　２ｃｍ）</td></tr>
<tr><td>特記事項</td><td colspan="6">眼球振盪</td></tr>
<tr><td rowspan="4">生徒Ｂ</td><td>眼疾患名</td><td>右</td><td>Peters 奇形，
発達緑内障，
白内障</td><td>左</td><td colspan="3">網膜剥離</td></tr>
<tr><td>教育的遠距離視力</td><td>右</td><td>眼前指数弁</td><td>左</td><td>0</td><td>両</td><td>眼前指数弁</td></tr>
<tr><td>最大視認力</td><td colspan="6">0.06（右　１ｃｍ）</td></tr>
<tr><td>特記事項</td><td colspan="6">羞明，左：表層義眼装用</td></tr>
</table>

７　単元の目標

地形図の読図や作図の地理的技能を身に付け，地域調査の手法やその結果を多面的・多角的に考察し，学校周辺の防災マップを作成，発信できる。

８　単元の評価規準

Ｃ「日本の様々な地域」（１）「地域調査の手法」

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に取り組む態度
①立体地図の作成や観察，野外調査を行う際の視点や方法，地理的なまとめ方の基礎を理解している。 ②触地図や立体地形図の読図，立体模型の触察を通して，地形図の読図や作図の地理的技能を身に付けている。	①地域調査の対象となる学校周辺に着目し，立体模型や立体地形図の触察から，地形の特徴や防災について多面的・多角的に考察し，表現している。	①作成した防災マップを使って，本校の児童生徒に学校周辺の危険性や避難場所について，発信する機会や方法を考え，実践しようとしている。

９　指導計画（全 10 時間　本時　６／10）

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）		
			知・技	思・判・表	主体的
一	１	「誰もが分かる防災マップを作って，みんなに伝えよう」というパフォーマンス課題から学習の見通しをもち，学習計画を立て，課題の解決に必要な地図の読図を方位や縮尺から理解する。			①（発言，ノート）
	２	学校周辺の地形図の読み取りを通して，等高線を立体地形図の山の部分の作成や触察から理解する。【４－(2)，(5)】	②（資料の読み取り）		
	３	学校周辺にある地図記号について，地形図を用いて，地図記号の種類や意味を触察から理解する。【４－(2)，(5)】	②（資料の読み取り）		
三	４ ５	これまで学習した方位，縮尺，等高線，地図記号を活用して，学校周辺の立体地形図を製作し，地形図全体を触察することで，学校周辺の環境や地形の特徴について，考察する。【４－(2)，(5)】		①（発言，ノート）	
	６（本時）	作成した立体地形図と広島市のハザードマップをもとに，本校が避難場所に指定されていない原因について触察を通して考察し仮説を立てる。【４－(2)，(5)】		①（発言，ノート）	

四	7 8 9	立体地形図と広島市のハザードマップをもとに立てた仮説を，校外の地域調査を通して，実際に検証し，結果をまとめる。【４－(4)，(5)】	①（観察，ノート）		
五	10	立体地形図に地域調査の結果を反映し，学校周辺の防災マップとして完成させ，校内の教員や生徒に向けて発信する。【６－(5)】			①（防災マップの発信）

※ この学習を生かして，特別活動「防災意識を高める」の単元で自宅周辺のハザードマップなどから防災対策を考える学習を行う。

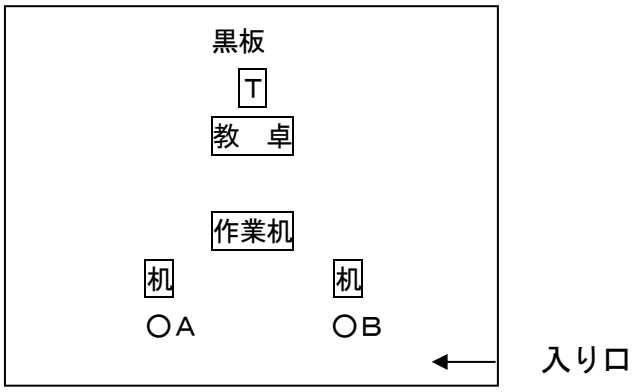
※ 【　】内は自立活動の６区分 27 項目のうち該当するものを記載している。

10　本時の目標

(1) 全体の目標

本校が避難場所に指定されていないことを地図から気付き，その原因を考察して仮説を立てることができる。

11　座席配置



12　準備物

触察教材（学校周辺の立体地形図，広島市土砂災害ハザードマップをもとにした土砂被害予測範囲の布と洪水被害予測範囲の布，触地図，方位距離確認用具）

13　学習指導過程

学習活動	指導上の留意事項	評価規準
１　導入（８分） (1)　本時の学習課題の設定	○広島市東区の指定緊急避難場所のリストから，多くの学校が避難場所に指定される一方で，本校が避難場所に指定されていない状況に気付かせ思考をゆさぶる。	

学習課題 どうして本校は避難場所に指定されていないのだろうか。	主要発問：どうして本校は，避難場所になっていないのだろうか？	
(2)　学習内容の確認	○パフォーマンス課題に向けた学習計画表を確認させ，本時の学習の見通しをもたせる。 ○立体地形図の触察を通して，本校周辺で起こる災害を生徒同士で対話しながら予想する時間を設定する。 ○本校の水害避難訓練と関連付けて，生徒の疑問を想起させる。	
２　展開（３７分） (1)　ハザードマップの考察 ①土砂被害の考察 （立体地形図，土砂被害範囲の布） 【予想される生徒の思考・発言】 「川の近くには土砂被害がないね。」 「山の近くは危ないね。」 「学校の東側と南側に土砂被害が多いね。」 「学校は少しだけ布が重なっている。」 「違う学校（戸坂小学校）の南西側にも土砂被害があるね。」 「学校の東南東には戸坂駅があり，さらに駅の東側全体には，山があるから，その周辺は，土砂が落ちてくる。」	○広島市土砂災害ハザードマップを基に作成した，①土砂被害の予測範囲を示した布と②洪水被害予測範囲を示した布を立体地形図に重ね，それぞれ触察させる。 ○生徒の気付きや考えを多く引き出すため，十分に触察する時間を確保する。 ○それぞれの被害範囲の布を被せる前に，立体地形図の触察をし，どこまで被害が出るか予想させる。	
②洪水被害の考察 （立体地形図，洪水被害範囲の布） 【予想される生徒の思考・発言】 「学校周辺はほとんど水に浸かるね。」 「学校の北側 150ｍには川があるから，そこから水が溢れて，地面の低い学校側（南）へ流れてくるね。」 「学校の西門近くには，水路があり，	○①の考察の後，その時点で安全な場所を予想し，その場所に印を付けるように指示する。 ○土地の高さや場所の位置などに着目させ，生徒が気付き考えたことや，発言したことを板書しながら，状況に応じて対話の過程を伝え	

そこも水が溢れて，広がるね。」 「土砂被害や洪水被害のどちらにもなっていないところ（戸坂小学校）があるね。」 (2)　考察から仮説を立てる。 【予想される生徒の思考・発言】 「この学校は，近くに川と山があるから，川が溢れて洪水被害が起こり，山から土砂が流れて土砂被害も起こる危ないところにあるから，避難場所になっていない。」 「私たちの学校が避難場所になっていないのは，土砂も洪水も被害範囲になっていない学校（戸坂小学校）があって，そこを避難場所にした方が良いから。」 「避難場所に認められるには，土地の高さが高い場所にあり，山沿いや川沿いなど災害の被害が起こりやすい地域から離れているという条件が必要だから，この学校は避難場所にできない。」	る。 〇生徒Ａについては，手前から両手の指先や掌を使って触ることを指示する。また，見て情報をつかみ，分かったことも発言するように指示する。 〇生徒Ｂについては，方位や距離，高さを含めた説明ができるように，用具を使って確かめるように指示する。 〇①と②それぞれの考察から分かったことを，「どうして本校が避難場所に認められていないのか」「避難場所として認められる条件とは何か」という視点で考えさせる。 〇生徒同士が対話の中で，共感や補足を加えながら，文章をまとめることができるように，対話の過程を板書して，対話の中で出てきたキーワードなどを伝える。 〇生徒Ｂには，生徒Ａが分かるような説明の仕方の工夫をするように促す。 〇生徒Ｂの説明が終わった後に，生徒Ａに再度説明させて理解しているかを確認する。	（生徒Ａ） 地図から学校周辺の特徴を読み取り，災害の危険性に気付いている。（思①，発言） （生徒Ｂ） 地図から読み取った学校周辺の特徴をもとに考察し，仮説を立て，新たな避難場所を提案している。（思①，発言）
３　まとめ（５分） (1)　振り返り・次時の学習の見通しをもつ。	〇本時で立てた仮説を，ノートに書くように伝え，次時の地域調査の日程と調査ポイントを確認し，意欲を高める。	

14　本時の思考力に対するルーブリック

１段階	２段階	３段階	４段階
支援の必要な姿	生徒Ａ		生徒Ｂ
地図から学校周辺の特徴を読み取ることや，災害の危険性に気付けず，考察して仮説を立てることができない。	地図から学校周辺の特徴を読み取り，災害の危険性に気付くことができる。	地図から読み取った学校周辺の地理的特徴を基に考察し，仮説を立てることができる。	地図から読み取った学校周辺の特徴を基に考察し，仮説を立て，新たな避難場所を提案できる。

15　主要参考文献・資料

広島市　「戸坂小学校区　土砂災害ハザードマップ」

「広島市　指定緊急避難場所（東区）」

川端裕介　著　「単元を貫く学習課題で作る！中学校地理の授業展開＆ワークシート」

国立教育政策研究所「評価基準の作成，評価方法の等の工夫改善のための参考資料」

国立教育政策研究所「「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料」

寺本潔　著　「教師のための地図活　地図帳・地球儀・防災・観光の活かし方」

中野英水　著　「パフォーマンス課題を位置づけた中学校社会の単元＆授業モデル」